

(様式1)

自 己 評 価 表

愛媛県立宇和島東高等学校(全日制)

学校番号(40)

教育方針	人格の完成を目指して、敬愛・自律・進取の精神を 培い、21世紀をたくましく生きぬく心身ともに健康な 生徒の育成に努めます。	重点目標	新しい時代を切り拓く人間力の育成
------	---	------	------------------

領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況	次年度の改善方策
心 身 健 康 で 豊 か な 心	基本的生活習慣の定着	気持ちの良い挨拶や清潔感のある身だしなみを意識した生活をさせる。<u>身だしなみ合格率 100%を達成する。</u>自転車の施錠率向上や正しいヘルメットの着用などの交通マナーや危機管理の徹底を図り、交通事故0を達成する。 A : 100～90% B : 89～75% C : 74～60% D : 59～50% E : 50%未満	A	身だしなみ合格率は100%を達成できていないものの合格率は確実に上がっている。今後も風紀委員に呼びかけを継続させ合格率を上げていきたい。自転車のヘルメット着用については確実に正しく着用できている。しかし、登下校以外での着用に問題があるように感じる。今後もヘルメットの重要性を訴えかけていきたい。	今年度は体育館が使用できなかったため、各クラス単位で身だしなみ指導を行った。全校生徒が集まる機会がなく、指導前の注意喚起もあまりできておらず、不合格者が多くいた。合格率は92.4%であった。来年度は従来の方法に戻し、指導の徹底を図りたい。ヘルメットについては多くの者は確実に着用できている。しかし、あご紐の緩みがあるため、事故にあった場合ヘルメットの効果があるのか疑問に感じることもある。今年度も行ったが、あご紐の付け方について指導を行いたい。
		生徒の健康と安全に留意し、学校全体で長期欠席や不登校生徒への早期対応を図る。生徒が経済面で心配することなく、安心して学べるように奨学金制度について啓発を行う。防災教育では「生徒が主体的に行動する態度」を育成するため、<u>防災退避訓練などを通して自らの命を守り抜くための「自助」「共助・公助」の観点も取り入れ実施する。</u>これまで以上に体験的・実践的な防災教育の推進に取り組み、防災意識の向上を図る。加えてアンケートを実施し、改善率アップを目指す。 A : 80%以上 B : 79～65% C : 64%～50% D : 49～35% E : 35%未満	A	学年主任、担任、教育相談課、保健厚生課員が連携して細やかな情報交換を行い、長期欠席や不登校生徒への早期対応を図った。奨学金制度については学校のホームページやさくら連絡網などで積極的に啓発を行い、対応した。防災委員の積極的な活動で、防災学習会の実施、6校合同避難訓練では抜き打ちの事前避難訓練の実施や放課後を想定した避難訓練、火災避難訓練を行い全校生徒が我が事として主体的に取り組むことができるように工夫し、防災意識が向上した。	引き続き学年主任、担任、教育相談課、保健厚生課員が連携して細やかな情報交換を行い、長期欠席や不登校生徒・多様な問題を抱える生徒への早期対応を図りたい。奨学金制度の広報も積極的に行い必要な家庭に十分な対応を実施していきたい。防災委員を中心により一層体験的・実践的な防災教育の推進に取り組むことができるよう防災学習会、6校合同避難訓練、火災避難訓練の実施方法を工夫していきたい。
	人権意識の高揚	差別を無くす行動力を育てる学習活動をさらに充実させるとともに、保護者・地域との連携を図る。 人権・同和教育研修会を充実させ、全教職員が共通意識をもって課題解決に向けて主体的に取り組む。また、学校内外の人権委員会活動の活性化を図るとともに、人権委員以外の参加者を増やす。 <u>人権委員会の活動や人権だより「Hidamari」の配布等を通して、生徒や保護者の人権意識の高揚につなげる。保護者からの感想の回収率が上がるよう、掲載内容の精選や工夫に努める。</u> [感想回収率] A : 100～81% B : 80～61% C : 60～41% D : 40～25% E : 25%以下	C	1学期に2回、全教職員を対象に人権・同和教育研修会を実施し、人権課題の解決に向けた個々の知識や実践力向上に役立てた。また、地域の研修会にも適宜参加し、学習したことを他の教職員と共有している。人権の日の校内放送、人権だより「Hidamari」の発行、「宇東差別解消宣言」の実践、各学年での人権目標の月1実施・掲示などを通して、生徒の人権意識の高揚を目指した。感想の回収率がクラスによってばらつきがあったり、校外活動への参加希望生徒が少なかったり、活動が不十分な面もある。意識を高め、積極的な活動につなげたい。	ホームルーム活動の公開授業、「人権の日」の活動などは、日常の取組として定着してきている。ホームページでの取組の発信は、学校の取組を知るうえで有益であるご意見をいただいた。より多くの方に周知できるよう、その方法や内容について考えた。また、啓発して終わりではなく、生徒や保護者がその内容をどう受け止めているかを振り返り、より効果的な取組にしていきたい。そのためにも、人権だよりの感想回収が必要である。今年度その回収率はよくなかった。来年度は特に保護者の感想の回収率をあげるため、掲載内容、発信や回収方法等を見直し、多くの回収につなげたい。引き続き、教職員研修の充実、生徒の人権意識の向上、保護者・地域社会との連携を図り、一人ひとりが様々な人権課題を解決しようとする意欲や実践力を培うことのできる学習機会の提供に努めたい。

領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況	次年度の改善方策
心身健康で豊かな心	読書の勧め	「朝の読書」の呼び掛けやホームルーム活動において読書会を実施することで、読書指導の充実を図る。「宇中文庫 Day」を設け、宇中文庫による集団読書を各クラス年間2回以上実施する。教科学習やホームルーム活動における図書館の利用を促し、読書冊数一人10冊以上（うち本校図書館利用一人5冊以上を目指す）を達成する。 A：10冊以上 B：9.9～8.0冊 C：7.9～6.0冊 D：5.9～3.0冊 E：2.9冊以下	A	「宇中文庫」の貸出を年2回、朝の読書の時間を使った読書指導(宇中文庫 Day)や夏休みの全校一斉貸出を実施。年2回の読書会の際には今年度は希望者も参加できるようにした。2学期末に行った図書に関するアンケートによると、読書冊数は全校平均6.4冊(昨年5.9冊)であり、「朝の読書の時間は充実しているか」の項目では、7月期同様90%(昨年86%)が充実していると回答している。廃棄図書委員会を開き整備を進める等、今後も図書室利用の促進のための活動を実施していきたい。	今後も「朝の読書」の時間や読書会等を有効に活用し、読書の意欲向上に努めたい。図書委員による「朝の読書」の呼び掛けの際に、今年度は図書室の本のコーナーの紹介等を行うようにしてきたので、継続していきたい。また、文学以外の図書の充実を目指し、新書の充実や新着図書のお知らせの見直しをし、図書室利用促進のため、生徒にとって安全で使いやすいものになるよう、今後も廃棄図書についても継続して行っていきたい。
探究心・実践力の育成	わかる授業の実践	自己調整学習の視点から、恒常的な授業改善に努める。また、新しい時代に必要となる資質・能力の育成と学習評価の充実を図り、授業アンケートにおいて生徒の授業満足度※90%以上を目指す。さらに、授業でのICTの活用を推進し、ICEモデルを基軸とした新たな学びの研究を進める。 A：100～85% B：84～70% C：69～50% D：49～40% E：40%未満 ※授業満足度は以下の方法で算出する。 (授業アンケート全体の平均点÷満点4点)×100＝満足度%	A	授業アンケートの「全体の平均」は3.48、満足度は87%であり、前年度同様A段階となる。教師の説明の仕方、熱意、授業形態の多様性、評価の仕方に関する評価に対する満足度はいずれも90%を超えており、本校の授業改善の風土の浸透が伺える。一方、生徒の自身に対しての学習習慣、主体性に対する評価は83%となっている。生徒の自己調整学習をより良く支援し、一人一人の自己肯定感を高める教育実践を目指したい。	今年度より全校体制となったSSH事業による課題研究の取組を通して、本校のSTEAM教育、教科等横断型授業の実践を通じた授業改善の風土を守り続けつつ、EILSなどのICTツールの活用の研究を深化させ、自律学習者、生涯学習者を育成するサポートの仕方を高めていきたい。さらに、各生徒が自己の進路実現のために、どのような学力・技能を身に付けたいか、どのように身に付けるか、ということへの意識を汎用し、また、目標を達成するためのロードマップを描き、PDCAサイクル化し、実現できる生徒の育成に取り組みたい。
		校内外の研修(教科等横断型授業の実施含む)・研究授業に年間5回以上参加し、自己研鑽に励む。授業の相互観察等(参観した場合は感想用紙の提出や声掛け)を行い、教科等横断的な授業の実践に努める。また、校内研究授業や授業研究会の計画及び実施を通して、授業力向上を図る。 A：5回以上 B：4回 C：3回 D：2回 E：1回以下		現職教育の計画に基づいた初任者並びに基礎研修者の研究授業を5回、教科や学年代表の研究授業を14回実施した。また、教科等横断型やICEモデルだけでなく探究の学びシートを取り入れた授業を実施したり、全教科において複数回学校訪問等他校の公開授業に積極的に参加したりした。研修や研究授業への参加回数は、年間平均5回以上はあった。	来年度も教科内外での研鑽を図っていきたい。自教科以外の教科や学科を越えた横断型授業の計画・実施の実践、相互観察の機会を引き続き積極的に進めていきたい。基礎研修者等の研究授業者への感想(アドバイス)をもっといただけるよう、今後も促していきたいと考えている。
	学習習慣の確立	TeamsやEILSを活用して適切な量の課題に取り組ませる。また、自己の学習について振り返る時間を設け、目標に向かう課程や達成状況を評価させ、自らに必要な学習量や内容を調整していく力を身に付けさせる。結果として1日平均3時間以上の家庭学習習慣の確立を図り、継続的な学びの姿勢を育成する。 A：3.0時間以上 B：2.9～2.5時間 C：2.4～2.0時間 D：1.9～1.0時間 E：1.0時間未満	D	9月の学習時間調査では理数科・普通科の家庭学習時間の総平均は173分(昨年度170分)、商業科は55分(昨年度73分)であり、特に商業科3年生の学習時間が大幅に減少していた。EILSやTeamsを活用した課題配信、EILS-PBTによるデジタル採点も軌道に乗り教員の負担軽減に繋がっている。長期休業中には、3年団の先生方の御厚意で教室開放の日を設け、多くの生徒が継続した学びを続けることができた。	商業科3年生の学習時間が少なく、受験に向けてのスタートが早く切れていなかった。検定取得に加え、秋の推薦等入試に向けて小論文や面接等の指導を早め、学習時間の増加につなげていきたい。2年生は、家庭学習時間が不足していることを受け、家庭学習で必要なものを家庭に持ち帰らせることで、学習意欲の喚起につなげたいと考え、私物持ち帰りの徹底を実施した。受け身でなく、自走できる生徒の育成に力を入れたい。

領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況	次年度の改善方策
探究心・実践力の育成	理数教育の充実	地域の未来を科学的に創造する人材育成のため、大学・企業・海外等、外部機関との連携強化により、創造性・国際性の伸長、科学的探究の更なる充実を図る。また、教科の学びと課題研究の学びをつなげる客観的評価システムの構築を図り、探究的授業の実現を目指す。科学系コンテスト等においては課題研究の出品数160以上、40件以上の受賞、地域貢献の意識高揚を図るため地域サイエンス事業への参加数500名以上を目指す。 (科学系コンテスト受賞) A:40件以上 B:39～30件 C:29～20件 D:19～10件 E:9件以下 (地域サイエンス事業等への参加) A:500名以上 B:499～400名 C:399～300名 D:299～200名 E:199名以下	B	愛媛大学をはじめ滋賀大学、東京大学など複数との大学、高校との連携を行っている。今年度新たに最先端科学技術について発展的に学ぶ関西研修を立ち上げ、実施に向けて準備を進めている。また、ICEモデルを基軸とした評価についても昨年度に引き続き、見直しを行いながら教科SSの他、複数の教科で運用中である。科学系コンテスト等への出品等173件のうち、受賞作品数は2月現在で46件。理数科・普通科理系だけでなく、普通科文系、商業科からの出品も多く、受賞を果たす研究も増加した。地域サイエンス事業イベントも活発に行われており参加人数は118名となっている。コンテストやオンラインイベントへの参加数は410名(昨年度同時期+60)となっており、学校全体で外部イベントやコンテストへの参加も活発化している。	国内外の大学や研究機関、企業・行政との連携を拡充する。商業科へのSSH事業の広がりを生かし、地域との新たな連携の在り方や研究成果を実社会の課題解決に生かすための研究の継続、連携についても見直しを行う。学びを可視化し、広く生かせるよう評価基準や「探究の学びシート」の改善を進める。また、卒業生メンターの活用をより進めSSH校としての実績を在校生に還元するシステムを構築する。国際性育成事業については、本年度の成果である年間を通じた計画的な取組をもとに発展的な取組を検討し、海外校との連携の在り方について研究する。 科学系コンテストへの出品数160、受賞作品は40とする。研究成果の発信方法を多様化し、特にSNS等を通じた研究成果や取組の発信をより進めていく。
	産業教育の充実	キャリア教育全体計画に基づいたキャリア指導を実践することで、ビジネスに必要な豊かな人間性と資質や情報活用能力を育成する。 <u>課題研究の充実を図り、地域探究学習を深め、コンテスト等にも積極的に参加する。</u> (コンテスト参加人数〔延べ〕) A:100名以上 B:75名以上 C:50名以上 D:35名以上 E:34名以下 資格取得を奨励して全商検定1級3種目以上合格者70%以上を目指す。 (全商検定3種目1級) A:70%以上 B:69～60% C:59～50% D:49～40% E:40%未満	C	課題研究の充実に向けた地域プロジェクトを8本企画して行った。徐々に生徒の意識も高揚してきたことを実感している。校外での活動も増えており、地域からの要請で外へ出かけて活動する生徒も増えてきている。コンテストへの参加人数は54名となっており、1つのコンテストでは県大会3位入賞の成績を収めるなど、3つのコンテストで入賞した。メディアの取材も受け地域の課題解決とは何か、地域の方と共に考えることができた。 資格取得について、3年生の全商検定3種目以上合格者は48.2%で、昨年度の39.8%から大きく増加した。	地域プロジェクトについては、生徒の意識が変わり、探究活動に臨む姿勢がよくなっていることを感じている。地域との交流回数は80回を超え、多くの活動に際して、地域の方から協力を得ているため、今後も継続した活動を行いたい。また、メディアからの取材も受け、地域の課題解決とは何か、生徒自身が考えることができていたので、来年度以降も活動を続けると共に、商品開発にも着手したいと考えている。 資格取得について、3年生における取得率は向上しており、さらなる資格取得を目指していきたい。

領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況	次年度の改善方策
魅力ある学校	生徒主体の学校行事	生徒一人ひとりが主体的に学校行事に関わり、<u>愛校心を育くむことや地域に貢献する意識を高めることにつなげる。</u> 学校行事満足度（普通以上）100%を目指す。 A：100～95% B：94～90% C：89～80% D：79～60% E：60%未満	B	1学期に文化祭と校内ボートレース大会、野球応援を行い、2学期当初には体育祭を実施した。毎年の行事であるが、生徒会が中心となり新たな取組を盛り込むことで、生徒主体の活動場面が多くみられる。特に文化祭では、地域連携を行うことができていた。	2学期末のクラスマッチにおいては体育館が使用できないなか、生徒会が中心となり新たな取組を行った。生徒一人一人を生かす有意義な行事となったと思う。周年行事もあるので愛校心を育むことができるように意識付けをしていきたい。
	部活動の活性化	「質の高い文武両道」を目指すなかで、生徒、教職員、保護者をはじめ、地域との連携も深め、より良い部活動運営を行い、心・技・体の調和が取れた生徒を育成する。 <u>部活動単位での地域貢献活動を年1回以上実施する。</u> 津島分校とのより良い部活動の連携を実現する。 四国大会に12部以上、全国大会には7部以上の出場を目指す。 (四国大会) A：12部以上 B：11～7部 C：6～4部 D：3～1部 E：出場なし (全国大会) A：7部以上 B：6～5部 C：4～2部 D：1部 E：出場なし	A	県総体での柔道部の男女アベック優勝に始まり、四国大会には11部が、インターハイなど全国大会には8部が出場している。国スポには、4部の部員が参加予定である。今後も活躍が期待される部が多い。結果だけではなくその取組の計画性や内容も評価されている。地域貢献活動なども行い、地域・保護者・生徒・学校のより良い関係の中で部活動が行われている。	高校の再編計画に沿って部活動改革もすすめられ、本校においても部活動の精選など検討していかなければならない。どの部活動も実績もあり、かなり熱心に取り組んでいるので、この状況が後退しないよう検討を進めたい。

領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況	次年度の改善方策
魅力ある学校	希望進路実現	望ましい職業観や勤労観を育成するとともに、生徒の能力・適性・希望を把握した就職指導を実践する。企業及び公務員情報の提供を充実させる。また、<u>受験前職場見学を推奨しミスマッチ防止に努めるとともに</u>、早期の採用内定率100%を達成する。 A：90%以上 B：89～80% C：79～70% D：69～60% E：60%未満	B	夏季休業中に希望者を対象に外部講師による就職ガイダンスを行い、生徒の能力・適性・希望を重視した就職指導（書類作成、面接、作文等）を行ってきた。求人票とともに送付されてきた資料だけでなく、補足資料を提供したり、各自でHPなどで調べるように促したり、応募前の職場見学に参加させたりして、企業理解や就職後のイメージを持たせることができた。適性検査の種類が主流だったSPIではないものも増え、十分な対応がとれていなかった。	学校斡旋による就職は順調に内定をいただくことができ、10月末には100%を達成できた。一方で、公務員については、希望者4名のうち、2名の合格に留まった。学力試験の対策不足を指摘された。早期に面談等を行い、状況を把握し、学力試験の対策も行っていきたい。また、職場見学や職業説明会などへの積極的参加を促し、早い段階での職業への興味・関心・理解を深められるようにしていきたい。
		<u>総合型選抜・学校推薦型選抜等に応じた適時・適材適所な個別指導の充実を図る。また、新課程入試に対応するため、教科等横断型授業の展開、定期的な情報交換を行うことで、国公立大学進学者100名以上を達成する。</u> A：100名以上 B：99～90名 C：89～80名 D：79～70名 E：69名以下	A	進プロ事業を活用し、先進校視察を実施したり、生徒との面談環境の充実を図ったりすることができた。新課程入試に対して各種データの分析をもとに戦略を立て、個別指導の充実を図ることで合格率が向上した。3月10日時点で国公立大学に119名の生徒が合格している。難関10大学も15名合格し、近年では最も多い数となった。	総合型・学校推薦型選抜については、個別指導の数が多く、教員の負担が大きくなっているため、計画的かつ効率よく行えるよう工夫したい。簿記を使った入試方法がなくなった商業科の進学については、年内の推薦入試でできるだけ生徒の進路が確定できるよう計画的に行いたい。医学科合格の生徒がいなかったため、医学科志望の生徒を対象とした指導の充実を図りたい。
	ボランティア活動や地域イベントへの参加	ボランティア活動や地域イベントに関心を持ち、可能な範囲での参加を促し、広く社会に貢献し地域を愛する人材を育成する。 <u>校内でのボランティア活動の企画や郊外のボランティア募集情報の提供を積極的に行う。</u> ボランティア活動や地域貢献活動（イベントなど）への参加70%以上を目指す。 A：70%以上 B：69～55% C：54～40% D：39～25% E：25%未満	A	宇和島市内での合同生徒会活動の取組や宇和島祭りへの参加拡大、部活動単位での地域貢献活動など地域貢献力の育成につながる取組が増えてきている。今後も様々な取組を生徒に紹介しながら、積極的・主体的取組に導けるように支援したい。	地域の活性化と高校の魅力化を進める上で生徒たちのボランティア活動や地域のイベントへの参画は必要不可欠になりつつある。商業科の取組、部活動の地域貢献活動、市内合同生徒会の活動などが一つの流れとなりつつある。これからは生徒一人ひとりの意識を高めていく必要があると思う。
業務改善	適切な勤務時間	<u>E I L S、E I L S－P B TやT e a m sなどのICT活用の推進、テレワーク制度の活用などを通じて勤務時間外在校時間の縮小を実現する。</u>会議の精選等を行い、業務の効率化を推進する。月に1回の「リフレッシュデー」を実のあるものにできるようワークライフバランスに対する意識を高める。	B	E I L S、E I L S－P B TやT e a m sなどのICT活用が浸透し、効率的な勤務につながっている。テレワーク制度も調査期間中や長期休業中に実施する方も増え、年次休暇の取得と合わせて勤務時間外在校時間は縮小の傾向にある。「リフレッシュデー」については管理職が率先して取り組んでいるが、さらに職員に浸透させたい。	引き続き、ICTの活用や教材の共有を推奨し、勤務の効率化を促していきたい。また部活動の休養日を積極的にとるよう促し、生徒も職員も心身の健康を維持し、職員のワークライフバランス実現に向けて啓発していく。
	職場環境の整備	健康管理医による健康相談や健康講座を定期的に実施し、教職員の疲労や心理的負担の軽減を図る。<u>教職員レクリエーションや教科・学年等でのコミュニケーションを密にして、メンタルヘルスケアの向上に努める。</u>月一回整備の必要な場所を確認し改善する。	B	定期健康診断、健康相談等の実施により教職員の心身の不調が軽度うちに対応できている。今年度は諸行事が一学期に集中し、体育館が使用できないなど職員に負担をかけることが多かった。整備の必要な場所は改善できている。	今後も定期健康診断を確実に実施し、必要に応じて健康相談を実施して教職員の心身の不調を早期に発見し対応できるようにする。今年度実施できなかった教職員レクリエーション等で教職員間のコミュニケーションを密にする。

※評価は5段階（A：十分な成果があった B：かなりの成果があった C：一応の成果があった D：あまり成果がなかった E：成果がなかった）とする。